

現代詩におけるオノマトペの象徴化 補説

小嶋 孝三郎

さきに私は「現代詩におけるオノマトペの象徴化」（国語と国文学）第四七三号、昭三八・八）を発表した。その中で心平の「ベリング・ファンタジア」（詩集「絶景」昭15）を取りあげ、原作にみる注目すべきオノマトペ表現が、改作では無造作に削られている点について、その理由を考えてみた。こゝにその補説を発表して、前稿の不備を補うとともに、オノマトペの象徴化ということについても今一度考えてみることにしたい。

小林好日は「音義説と音声象徴」の中で、次のようにいっている。擬声語（擬容語を含む）は全く言語の記号的性能を以てしては、適切に表現できないものを、暗示的にもつと直接的に現したもので、音声概念を、概念が対象を呼び起すやうな迂遠な経路を取らず、音声そのものの中に、対象が聴覚的映像として現れるものである。概念を通して現れるよりも、遙かに具体的であり、対象に伴ふ気分をはずきり感ずる。（「国語学の諸問題」101—102頁）

オノマトペの特性が、記号的意味（概念）を抜きにした暗示の意味に依存しながら、より直接具体的気分を表わす点を指摘している。

記号的意味というのは、辞書の語義のことであって、例えば「ス

現代詩におけるオノマトペの象徴化 補説

ルスル」は、1、なめらかにすべる（のびる）さま。2、とどこおりなく進行するさま。などの概念がある。これに対して、運行滑動する軽快な感じとか、渋滞なく進展する快感といった気分が同時に感じられることも否定できないであろう。「ルスル」に対して「ズルズル」では、その迂り具合にかなりの抵抗があり、不快感まで感じられる。こうした感じを一般に語感といっているが、オノマトペでは最初から概念がないのであるから単に音感の暗示の意味だけに依存している訳である。

オノマトペの象徴化は、このような暗示の意味——つまりオノマトペの特性——が十二分に發揮されるところに成立している。では一体、この暗示の意味によるオノマトペの象徴化は、具体的にどうして成立しているであろうか。

Bering-Fantasy

1

海は己れの高鳴りをきき。

天は己れの天をみつめ。

なだれる波に波はくづれ。
天はどこまでもの天につづき。

海は非情の海鳴りをきき。

天は非情のから鳴りをきき。

2

月すべる。

永山。

ふざけ。

たはむるる。

鯨。

3

ウウウウウウウウ。

ウウウウ。

イイイイイイイイ。

イイイイ。

朝モ昼モ夜モ夜中モキノフモケフモ。

十文字八方咆エマハリ。

却ツテガラントシテシマフソソナ吹雪ノマツタダナカ。

海ト天トヲ遮断スル大水盤ヲシトネニシテ。

疲レタ熊ハ眠ツテキル。

ウウウウウウウウ。

ウウウウ。

イイイイイイイイ。

イイイイ。

鼯ハ唸リニカキ消サレ。

≡ダレモ氷リ。

灰色ノ雪煙リノナカニ更ニ僅カニボンヤリ白ク。

四肢ヲ投ゲダシ眠ツテキル。

4

風いだ夜中の海面に。

億兆億の雪が沈む。

死への道連れであることに華やきながら。

それぞれ先きを争ひながら。

死よりもしづかに。

雪雪は。

沈む。

「現代日本詩人全集」(昭29)で削除された部分は3、である。

一体、作者はどういう理由でこの部分を削除したのであろうか。

問題は3がこの詩の構想上どういう位置を占めているかということである。そこでこの詩の構想をみると、大体次のようになってゐる。

第一連 無辺際が続く天と海——非情の海鳴り——大自然の生命

第二連 月と氷山と遊ぶ鯨——非情の自然界と生

第三連 吹雪の氷山、咆え狂う自然——疲れた熊は眠っている

——生の幻想

第四連 風いだ夜の北洋——生死を超越した自然界の美——雪の幻想

以上四連から成る。1から2へ、2から3へとカメラは次第に焦点を不動のものとし、白熊の生がクローズ・アップされる。そして4は再びもとの焦点にかえる。荒海・風・荒海・風、動靜動靜、及び強弱強弱という起承転結による見事な構成である。

なるほど2の「ふざけたはむる鯨」は非情の海や氷山をしりぬに悠々、自適する生を描いて余りあるものであろう。がしかし、これを受けて——否、これと対照的に、3では白熊の生活が描かれている。その鬱勃たる咆吼には、歯を喰いしぼるような苛烈さと、なまなましい生命感が溢れており、作者の内的世界を象徴している。心理的な音階の起伏は、この第三連に至つて頂点に達する。しかもこの第三連をうけて、第四連の彩りが一層鮮烈なイメージと化してゐるのではなからうか。

しかし、第三連を削つた場合、「海ト天トヲ遮断スル大水盤」は消え、「灰色ノ雪煙リ」も、「吹雪ノマッタダナカ」に「四枝ヲ投

ゲダン眠ツテキル」白熊もいない。そしてそこには、「億兆億の雪が沈む」だけである。かくしてこの詩の主題は非情の自然美を描いただけのものとなり、迫力のない、トーンの弱い、全く小じんまりしたものになってしまうのである。

1・2・4は視覚的・叙景詩的・絵画的である。「なだれる波に波はくづれ」、「月すべる氷山」、「華やきながら」など。これに対して、3は聴覚的・音楽的であり、象徴的である。ここには明らかにムードの違い、質の違いがある。この異質的なものの組み合わせによる立体的効果、云わばステレオ化は決して見落してはならない。片仮名の与える緊張感¹は日常的な世界を超えた逞しさ、烈しさを感じさせる。「キノフモケフモ十文字八方咆エマハリ」咆えれば咆えるほどその空しさを感じる熊。「吹雪ノマッタダナカ」「灰色ノ雪煙リ」そうした時と環境、敵しい現実の中に、疲れた「熊ハ眠ツテキル」「四枝ヲ投ゲ出シ眠ツテキル」。吹雪の中にその存在は「ボンヤリ白ク」。だがどこまでも力強い生命感²。

この詩は二つのオノマトベを軸として、原始、野性のリズムを奏で、自然の重圧を感じる強烈なイメージを形成している。そしてそれが、作者の潜在意識の体感的・生活的幻想となっている。それは白熊の咆吼には違いないが、決して単なる咆吼ではない。海鳴りと考えても狭い。天涯孤独の叫びと考へても云いすぎである。云わば大自然の生命の叫び声であり、北洋ベーリングの壮嚴なファンタジアそのものである。その表現における射程の確かさと、それによって生ずる暗示的意味の振幅とは、日常的な記号の貧弱な概念などと違って、より直接具体的気分を表わしている。

然るに作者はこのオノマトペを、否3の部分全体を惜しげもなく削除した。この詩篇の基調をなしていると思われた部分を割愛してしまつたのである。

なるほど改作した作品は美しい彩りをもつた一幅の絵画と云えよう。がしかし、そこにはもはや生活意識が大きく後退してしまふ。勿論このことだけで作者の思想を云々し、目に角立てて民衆との断絶をあげつらう訳ではない。もともと心平はアナキズムの傾向から出発している人ではあるが、プロレタリア詩派とは異なる独自の

境を行く異風の詩人である。従つて、そのことは問題にならない。しかも、もはや今日のように大成した心平には「生活意識の分解によつて、作品の前面に表現意識がはつきり浮きあがってきた」ことを否定すべくもないのであるが、そのことを裏書きするかのように改作されたそのことも、それなりに又問題となるであらう。

私は、原作にみる「生活意識と表現意識とのバランスの美しさ」が、オノマトペの象徴化を軸として達成されていると判断するが故に、あえて揚言せずにはいられないのである。